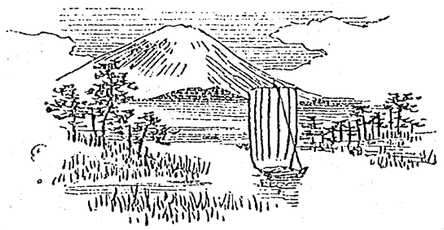
慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人間の発展
Sub Title	
Author	建部, 遯吾
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.7 (1909. 9) ,p.174(52)- 197(75)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090901-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のであります、既往を繰り返して考へて見ますると色々な變化が起りますが夫等の顚末を御參考迄申し述べた次第であります、（拍手）



人間の發展

慶應義塾理財學會に於て
文學博士　建部遯吾君述

私は人間の發展と云ふ題を掲げました、是は卽ちヒユーマニテイーのデベロープメントと云ふ意味でありまして、全體今日までヒユマニテイーと云ふ言葉は我々は屢々聞くのであります、併ながら此ヒユーマニテイーと云ふ事は歷史あつて以來果して一定不動なものであるか、ヒユーマニテイーと云ふ事の觀念は學者に依つて殊に思想家に依つて、稍々其意味を異にする者もありまするが、ヒユーマニテイー其ものゝ客觀に於ける實體は果して歷史あつて以來、一定不動のものであるかと云ふ事に就て、少しく歷史上の事實を調べて見るとヒユーマニテイーは非常な發展を遂げて居るのである、歷史の始よりヒユーマニテイーと云ふものは若し言ふ事を得べくんば、左樣なものがあるとしました所で、今日言ふ所のヒユーマニテイーと

は甚だ違つて居るのである、否實を言ひますと、ヒユマニテイーと云ふものゝ客觀的に成立したのは實に今日に於て始めてゞあるのであらうと云ふのが私の斷定であります、其事に就て聊か歷史の大體の事實の後を迚つて御話して見たいと思ふのであります。

ヒユーマニテイーは如何樣にして發展して居るかと言ひますると、大體に於て二つの點があります其一つはヒユーマニテイーの分量の增した事であります、僅かに五十人七十人を以て組織するものもヒユーマニテイーと言ひ得べくんば、其ヒユーマニテイーからして今日十幾億に增加して組織するに至つたのは卽ちヒユーマニテイーの人口の量の上からして非常な進步と言はねばならぬ、卽ちヒユーマニテイーの發展の肝要な事項の一つは人口增殖と見るのであります、又第二點として、人間の發展は交通の發達と云ふ事である、實を言ひますると、世界が廣くなつた、地理學上の世界が廣くなつたと云ふ事を言ひたいのであります、世界は其實古往今來少しも廣くはなりはせぬ、極く精密なる事を言へば世界は縮つたのである、夫れはどう云ふ事であるかと云ふと地球の熱度と云ふのは約六十萬年にして一度の割合を以て冷却しつつあります、凡そ熱が冷却するに隨つて、物が縮まる、現に地震と云ふものがある、又火山の噴出すると云ふ事があります、是は表面が縮まるのに內部は左程縮らないのでありますから、噴出すのである、是を喩へて言ひまするならば蜜柑を押潰す時に內から汁抔が出る如き譯のものである、淺間山、磐代山と云ふやうに日本に於ては近く火山の噴出を經驗せしむる以上、地球は實に小さくてそなれ、大きくはなつて居らぬのであります、然るに此時に於て否此地球の表面に於て人間が發展して居ると云ふ事は如何なる事であるかと云ふと、人間の占めて居る地面は廣くはならない、今まで御互に往來し、御互に交通せざる所が次第に交通を始めて來たと云ふに外ならぬのである、故に人口の增殖に對して今一面には夫等人間の發展卽ち

交通が發達するに至つたのであります、此二つの方法に依りまして、人間は古より非常な發展を致しましたと云ふ事を少しく論じて見たいのであります

先づ人口の增殖に就きましては暫く我が日本に就て見ますると、世界の人口の增殖に於ても稍々思半に過ぐる所があります、成る可く世界全體を見たいのでありますが、吾々は不幸にして夫れだけの材料がない、手に入るだけの材料で見ると先づ日本の人口に就て歷史上一番古く出て居りますのが神代であります、で神代には八百萬の神達が天の安川原の神集につどひ給ひてとある、天の安川原は今の日比谷が原であります、是に神集ひに集ひ給ひたと云ふ事になるのである、不幸にして此八百萬と云ふ事は別に統計の法を講じて設けられたのではなかつたのでありますからして不幸にして材料にならぬのであります、是等の事に就て私は多少研究を始めましたが、吾々の先輩で「世界年鑑」を書かれた伊東祐穀と云ふ忠實な學者がありまして、其時分の研究の屆く限りはやつたので暫く其先輩の研究に基いて、是れに據りますると氏の計算によると紀元一千二百三十年、推古天皇の十八年には日本の人口が四百九十八萬八千四十二人と云ふのであります、一々擧げる事は甚だ煩らはしいが此人口增殖の大勢を見る爲に節々だけを擧げて見ますると、ズッと下りまして、千三百九十八年、聖武天皇の天平八年には八百六十三萬一千七百七十人に殖えて居る、夫れから殆んど千年ばかり一足飛びに下つて德川時代の中程、紀元二千三百八十三年、中御門天皇の享保八年には日本の人口が二千六百六萬五千四百二十二人と云ふ數が出て居ります、德川時代には人口は左程大いなる變動なくして而して今上天皇の明治五年今を距る三十七年でありますが、其時には如何と云ふと卽ち三千三百十一萬八百二十五人であるのであります、歷史に於ける日本人口の增殖は大體斯くの如きものと見て大いなる間違ひはなからう、此人口增加の趨勢に就きましては、殊に日淸戰爭、日露戰役に至る間、吾々は此日露開戰を說くの必要

上から頗る綿密に調査をしたのであります、其調査した所の材料が揃つて居りますから容易に餘り大なる間違のない調査が出來たのであります、要するに一萬人に就て年々人口の增殖が百二十三人と云ふ位までに進んで居る、夫れが爲に今日は殆んど約五千萬の人口と云ふ事は諸君の御記憶に常に新たなる通りであります、然らば隣國の支那に於ては如何である、日本は僅か三千年足らずの間に、否推古天皇からであるから僅か二千年足らずの間に五百萬足らずからして五千萬人に殖えて居る、世界が全體此割合で殖えて居るかと云ふに隣國の支那に於ては材料の不足に困ります、支那は伊東先生のやうな人が未だ調べて御出になりませぬから大變に困る、誰も知つて居る通り實際から言ふと如何にも支那は大國と見えて、チョッとした事にも澤山な人間を使ふた事が分る、例へば春秋戰國の時に春の伯起が趙の軍四十萬を坑に落して之を塵にしたと云ふ事がある、六王畢四海一、蜀山兀阿房出と云ふやうな驪山に大土工を初めました、其工事には七十萬人を役した、一說には七十萬人の工夫は皆工事の勝手を知つて居るから是が生きて居つては其勝手の知れる虞があると云ふので打殺したと云ふ說もあります、是等は文辭の誇張でありませうけれ共、數だけで以てどう云ふ結果が出て來るかと言ひますると、支那は兎に角大國で夙に人口が多くあつた事は分ります、今吾々素人の間には支那の社會殊に人口はどの位あるかと云ふ研究をして居らぬのであります、どうも支那に就ては何事も言ふ事は出來ぬ、其南の印度はどうかと云ふと是も同じく困るのであります、殆んど是に對して何等言ふ所も無い、初めから滑稽として迎へられる外ない、然らば今度西洋を見ますると、西洋に於ても人口は非常に增して居る事は誰しも想像しますがどの位增して居るかと云ふ事に就て多少の調査は學者の間に初つて居りますが西洋に於ても人口統計で極めて完全な且つ確實なと思へるのは千八百二十年からかと覺えます、夫れに據ると希臘のアゼンスに於きましては

紀元前三百九年に既に人口が二萬二三千人の平民と一萬の歸化せる外人と及四十萬の奴隷を持つて居つた、夫れから亞弗利加の北岸で羅馬と長年戰爭をして紀元前百四十六年前に滅ぼされた、カーセージであります、此滅亡の時に於ても尙七十萬の人口を持つて居つたと云ふのであります、而して羅馬に至りましては羅馬の市府に致しましても人口の增加が最も早いのでありまして紀元前四百六十三年に於て既に武器を執つて戰爭に耐ゆるの年齡の者が十二萬四千二百十五人あつたのであります、一般の歷史には此武器を執り得る壯丁、若者の數の四倍を人口の實數とすると云ふ事になつて居ります、夫れで計算致しますると、其當時羅馬に於ける總人口が既に四十九萬六千人あつたとしなければならぬ、然るに紀元前三百三十八年に於きまして、公民の數十六萬九千、從つて總人口が六十七萬六千人を數へる、紀元前二百六十四年には公民の數が二十九萬二千三百三十四人、總人口が既に百二十萬に達したのであります、而して奴隷の數が此外に尙五十萬を數へた、奴隷の數は更に多數であつたと云ふ說もあります、而して紀元前七十年前に至りましては公民の數が四十五萬人總人口が百八十萬人で是は固より羅馬及び其周圍に住して羅馬に對して參政權を有する者の總計算であります、然るに紀元前二十八年の統計は伊太利全體の自由公民を計算致しまして四百六萬三千人として居る、卽ち伊太利の自由人民は既に一千七百萬に上つたと云ふ事が分るのであります、當時羅馬の人口は少くとも百八十萬に下らなかつたと云うて宜しい然るに紀元後に至りまして、セオドル帝の時であります、紀元前第四世紀の時でありましたが、其時に至りまして、羅馬が衰へて仕舞ひ人口は百二十萬人に減つたと云ふ事になつて居ります、是はアゼンスからカーセージ及び羅馬と云ふ古代の三大都會に於きまして、人口增減の趨勢を察し之に依つて古代に於ける人口の變遷の大體を想像するの材料に供したのであります、さうして中世以來歐羅巴各社會の人口は如何であつたか

中世は御案內の如くダークエージと云ふのでありますから誠に數量上の計算は困難でありますず、御承知の通り數學は哲學よりも文明な學問でありますず、哲學は中世に於て頗瑣哲學が可なり盛えて居つた、併ながら數字はモウ少し人間が落付かなくては發達せぬ、本校の沿革は存じませぬが、早稻田大學抔を見ましても文學科哲學科は夙に開けましたけれ共、理工科と云ふものは第二期擴張に於て開かれた次第であります、卽ちダークエージに向つて統計でありますとか、數量的觀念を求めるのは所謂木に緣つて魚を求ると云ふ事は免がれませぬ、併ながら今日に於きまして幸にも佛蘭西と云ふ國に就きましては誠に忠實な學者がありまして其結果を吾々が聞く事が出來るのであります、夫れは彼のルバッスールと云ふ學者の計算に據るとゴール人の人口は六百七十萬となつて居つたのであります、夫れからシヤーレマン帝時代の佛蘭西丁度今を距る事一千百年ばかり前でありますが日本は先きに申した聖武天皇天平八年の時代に殆んど相當するのであります、其時に佛蘭西の人口は八百萬乃至千萬と云ふのであります、夫れから色々な沿革がありまして、千三百廿八年に至りまして既に二千萬乃至二千二百萬と云ふに進んで居るのであります、夫れから一千七百十五年ルイ十四世の歿くなつた三年後に大變減りまして僅に千八百萬と書いてある、然るに千七百七十年の時になりましては又大いに回復致しまして、二千四百五十萬、夫れから二千八百一年に至りまして玆に卽佛蘭西に於きましては初めて第一の人口調査が行はれたのであります、其時には二千六百九十三萬〇七百五十六人と云と風に多くなつて居る、此數を見ると伊東氏の日本の人口に關する研究とルバッスール氏の佛蘭西の人口に關する研究の中に異なる所がない、如何にも符節を合するには驚かざるべからざる事であります、丁度德川時代の末葉に於ける日本の人口は約二千七百萬で聖武天皇の天平九年、卽ち千二百年ばかり以前の人口が八百萬であります、佛蘭西も丁度夫れに合つて居る、餘程

面白い、卽ち日本と言ひ佛蘭西と言ひ千二百年前に於ては八百萬であつたが約三倍位增加して居る此人口の增加は隨分著しい、千年と言へば餘り短い時期でもないが、然らば輓近一百年間に於てはどの位になつて居るかと云ふと一百年間に於ての人口の增殖と云ふものは更らに著しいものがあるのであります、是等の數を餘りクド〳〵して讀み上げるのは如何はしい事でありますけれ共、數と云ふものは甚だ興味のあるものでありまして、文學抔よりは遙に數と云ふものは面白いものであります、吾々は數の音を聞きますると、天籟の音樂を聞くの感じが致します、暫く御免を蒙りまして諸君に私の此秘藏の樂みを頒かたうと思ふのであります。夫れで十九世紀に入りまして當時の文明國に就て見ますると、數と云ふものは重もな國だけを擧げますると、千八百年に於ける人口と夫れから五十年だつて、千八百五十年に於ける人口と千九百年に於ける人口と此三つを是から擧げるのであります、露西亞を見ますると三千八百八十八萬人次ぎが六千二百二十萬人而して一億一千二百四十三萬人、米國は五百三十一萬人より三千二百六十萬人に至り、而して更らに七千六百四十五萬人となつて居る、獨逸は二千一百萬、二千五百四十萬人、更らに五千六百三十七萬人になつて居る墺地利匈牙利は二千三百十萬から三千二十八萬に至り更らに四千五百四十萬人となつて居る、日本は二千五百五十萬人より二千七百八十五萬人に至り更らに四千七百八十萬人となつて居る、此順序は總て現今の人口の順序に倣うたのであります英國は千六百二十萬人から二千七百三十七萬人に至り、更らに四千百八十四萬人に至つて居ります佛蘭西は二千六百九十萬から三千二百五十萬に至り、而して三千八百九十六萬に至つて居ります、伊太利は千八百十萬から二千三百六十二萬人に至り、更らに三千二百四十五萬となつて居る、夫れから、西班牙、瑞典、那威、白耳義、ルーマニヤ葡萄牙、和蘭、瑞西、希臘、セルヴヰヤ、丁抹是等の國々は悉く略して總て以上述べました國々に

就て其統計を見ますると、是等文明國に於ける人口と云ふ點に就きましては第十九世紀の劈頭は二億〇四百七十四萬しかなかつたが夫れが三億一千四百卅七萬となり而して第十九世紀の末年廿世紀の初には五億〇八百二十八萬と云ふ事になりました、文明に於きましてヒューマニティーが此僅か一百年間に如何に增加したかと云ふ事は是でも分るのであります、世界人口增加の趨勢は大抵是で察せられます、併し茲に注意すべきは文明國以外の人口も斯る比例で進んで居るのではない、卽ち其證據には一百年よりは其前の千年間の社會文明國と稱せらる、國に於ても餘り多くは進歩しなかつた、極く大體を言つて見ると、其千年間に於ける發達と云ふものは、其後の百年間の發達と云ふものと餘り大差がない、千年間に於て三倍三分の增加があつた、而して其後の百年間の於きましては二倍五分の增加があると云ふ位であります、其通り文明の進歩に依りまして、人口の發達は非常に違ひますから、是等文明國を除いての他の國々に於きましてはさう云ふ割合に進んで居ると云ふ事を確に言はなければならぬのであります、而して此間に於きまして人口密聚的生活の進んで居る事は著しき事實であります、併し世界の大都會の百年間の人口の增加を申しますると、倫敦は矢張り千八百年から千九百年までに八十六萬五千より六百五十八萬、紐育は六萬一千より三百五十三萬に進んで行き、巴里は五十四萬八千から二百六十六萬に進んで居る、ベルリンは十七萬二千より百八十八萬に增加しシカゴは四十一萬七千から百七十六萬まで進んで居る、然もシカゴは其の初めの計算は千八百三十七年であります、維納は二十三萬一千より百六十六萬に進み、支那の廣東は百萬より百六十萬に進んで居る東京は五十七萬七千より昨年の市制調査の結果でありますが、百五十九萬に進んで居る、セントペトルスブルグは二十二萬から百二十七萬に進んで居る、米國のヒラデルヒヤは二十二萬二千より百二十九萬に進んで居る、此一百年前に人口の多きは世界の中に於きまして

は支那の廣東であつた、其當時倫敦、紐育、巴里も遙かに其發塵を拜して居つたと云ふ事が分るのであります、所謂今昔の感と云ふ事は支那人が言つて居ります、實に其通りである、而して人口二十萬の都會の人口增減を比べると斯う云ふ事になる、總て第十九世紀の末に於てゞありますが、二十萬以上の人口は英國に於て百分の二十四・四、然るに一萬以上の都會の人口增進の比例に於ても五十九分の五でありました、是に於ては色々面白い事があります、併し飛んで日本を見ると二十萬以上人口の總計は百分の七・五でありました、而して一萬以上の人口百分の十四・五だけにならぬ未だ〳〵日本人は密聚生活が英吉利人よりも遙に尠ないと言はなければならぬ、此人口の密度卽ち土地の單位に於ける人口の數を擧げますと、一キロメートルの平方にしまして、最も密聚せる所は白耳義であります、此處には二百二十二人居ります、其次ぎは英吉利が百二十七人、其次ぎが日本で百十七人、其他伊太利が百十人、獨逸は百人に滿たずであります、斯くの如く人口に關して言ふ事は色々ありますけれ共之を綜するに人口と云ふものに付てヒューマニティーは人間の歷史あつて以來非常に發展をして居ると云ふ事は明らかであります

然るに唯々人口其ものゝ發展をして居るのみならず、人の交通を營む點に於て進んで居る事は非常なもので人間が發展をすると云ふ事に就て此交通の便不便に依つて其度の違ふと云ふ事は明らかであります、例へば寒村僻地に於ける五戸七戸或は十戸の邑の如き交通の稀なる所に於ては人智開發の遲々たる性情の發達の遲々たると云ふ事は言ふ迄もない、然るに東京或は京都、名古屋と云ふ所であると人間は見馴れ聞馴れと云ふ點から或は道德上或は智識上或は風俗上或は精神上の發達を早く遂げると云ふ譯になる、是等は詰り人間の發展の一方面で以て交通の發展と云ふ點から觀察されねばならぬのである、全體交通と云ふ事は大體一面に言ひますると世界は東洋と西洋と二つに分ると言うて宜しい、其東洋と西洋とは歷史上古き時期に於ては多少の交通を致したのである、然るに中頃から致しまして斯る交通が絕えまして東洋は東洋だけで次第に交通を進めて行き西洋は西洋で又夫れに交通を進めて行き、斯くの如くにして發達して行きました所で西洋の世界に於ては交通と云ふ事が非常に發達致しました、遂に東洋にまで其手を屆けた、是に於て東洋と西洋とが再び交通の機運を開き、遂には現今の如く世界交通の時期に至つたと云ふのが此ヒューマニティーの發展に於ける交通發展の大勢觀であります、交通の點に就きまして細かに述べる事は時の許さゞる事でありまするし又斯う云ふ事は頗る繁雜の事でありますから大體の事に止めて置きまして、其間に於ける一二の著大な事變に就て、交通の發達史上の一二の著大な事柄に就て少しく世界的事情を擧げまして さうして大略立論の參考としやうと思ふのであります。

今東洋と西洋の關係を考へますると極く古代に於ても交通が多少あつたと思ひます、例へばセミラミスが西洋の紀元八世紀に於て印度を征めて來た、是等は卽ち東洋の一部たる印度に向つて西洋の一部たるバビロニヤの方から交通を開いた凡そ交通と云ふものは最も發達する時期に到ります以前に於きましては交通の爲めの交通では決してないので必ず何か或目的を有して居る所の交通であります、其目的に之を五つに分ける事が出來る軍事的交通、宗敎的交通、政治的交通、社會的交通及文化を普及する目的たる文化交通であります、而して此セミラミスの遠征による交通の如きは言ふまでもなく一種の軍事的交通であります、斯くの如き交通は吾々夙に記憶して居ります、夫れから又じ目的を以て行はれたものを言ひますと夫れより二千二百年ばかり過ちましてペルシヤが希臘を襲うた、夫れから二百年過ちますとアレキサンドルが今度ペルシヤの方から中央亞細亞及印度まで征めて來たと云ふ交通があります、是は歷史上に於て何等の事情もないが、私一個の說として

御紹介致しますならば例へば或學者の説に依ると支那の黄帝と云ふ人がある、是は黄色人種の元祖であると言つたが、之は其實アッシリヤの人である、而して支那の文明はアッシリヤから行つた、デ黄帝はアッシリヤの文明を以て一切の初まりとする、ナカ〳〵器用な説として多少世間の注目を引いたのでありますが今日之を御紹介するは餘り陳腐でありますが、併して唯々是を引合に出しましたのは支那に對して所謂同胞の吾々から言ひますると西亞細亞即ち西洋の一部たる西亞細亞と東洋の中心に近い支那との交通は歴史以前に於て行はれた事がありと云ふ説があるのであるから、其事をチョッと一言するに止めるのであります、而して明かに歴史上支那と西洋と交通のありましたのは史記の大宛の歴史と後漢書の大宛列傳を見ると明かに書いてある、即ち漢から種々の國々に交通を開いて居るので、即ち漢の張騫、所謂博望侯が西域に使して大宛月氏等と交通を開いた、此時に於きまして漢は政治的目的を以て交通を開き大宛月氏は通商の目的を以てしたのであります、加之重ねて西域に使したのは、元狩元年、西洋の紀元前千二百年になつて居るのであります、それから驃騎將軍衛青が匈奴を討つたのは是より二年前であります、それで遠征に對する嚆矢として引合に出ることであります、藤田東湖の詩にも「三決死矣而不死」といふ更に「嫖姚定遠不可期」と言つて居るのは即ち霍嫖姚であります霍光であります定遠は後漢の班超、班定遠であります、それで是等嫖姚定遠が萬里の遠征を試みます前に既に張騫が西域に使せること、驃騎將軍が匈奴を討つたと云ふ事があります、是等の人はとう云ふ方面に赴かれたかといふと張騫の遠征が面白い、今その國の名前の中一二を擧げますと彼は漢から段々西の方へ行きそれから少し南へ行くのであります、夫れから遂に太秦に至つた、京都の近處に在る太秦といふ字であります、此太秦は後に佛菻と申しました、其太秦と云ふ處まで盛んに交通したことは事實であります、其地點は何處かといふと今日に

於て是が三つの説がある、リヒトホーフェンに據れば是は羅馬だと云ひ、ブレット氏の説ではシリヤだと云ひ、我が白鳥博士は之を埃及だといふ其の何れであるにせよ前漢の張騫時代に於きまして既に支那と埃及、若くはシリヤ羅馬に交通のあつたことは事實であります、然るに一度此の如き交通といふものは之を喩へて言ひますると火事で半鐘が鳴ると野治馬が驅出して出て行く、モウ火は何處だか分らなくなつたとでもいふ樣な譯で所謂狂風欻忽捕へる處も無く、其効果たる一時にして消失せる、故に衛青並に張騫の交通も其影響其効果が常住になつて居ると云ふ譯にいかぬ、此の如き事は其光輝を搏へて無かつたのでありますがズッと後に第十三世紀に於きまして再び成吉可汗の遠征があつた是も亦東より西に向つたので東洋より西洋に向つて大に移住して居るのであります第十五世紀の初めに於てはモゴル帝國が興りましたが遂に印度を風靡するに至りました、斯う云ふ風に皆大風が吹いて通るといふ狀態で遂に永續する處の結果を殘すに至らなかつたのであります、斯樣に東西は時々何か思ひ出した樣に交通したことは僅かに有りました到底東西の交通區域は長く或一種の結合、連鎖を以て結付ける迄には至らなかつたのであります、然る間に東洋は東洋丈けの區域に於て西洋は又西洋丈けの區域に於きまして着々と其交通關係を進めて行つたので、之に付きまして日本と支那との關係は、或は遣隋使であるとか遣唐使であるとか或はズッと昔の應仁天皇の朝にも三韓禮聘がありまして朝鮮の人が日本へ參りましたこと、モッと古くは天ノ日槍が來、又モッと古くは素盞嗚尊か三韓を經略したといふ樣な段々確かで無い處まで溯つて行きますが、是等は皆さんの歴史に溯つて御推測なさるに任せて暫く省きます、又西洋が西洋中相互に交通せる事蹟の如きは西洋の歴史を繙くと段々書いてある、是亦、大體に於て推論なさることが必要であるといふ事を御勸めするに止めます、此の如くにして東洋は東洋として西洋は西洋として次第に其交通範域を

廣め今より三四百年前卽ち西洋の中世史の一部が近世史になる時に至つて西洋の交通といふものは非常に開けて參つた、同じく西洋と云ひましても西亞細亞、と歐羅巴と兩者の關係が又甚だ面白い關係がありますがそれらは總て略しまして兎に角近世の初は是如何なる時代であるかと云ひますと歷史家は之を名つけて發見殖民の時代と云ふ時である、扨て近世史は交通を標準として五期に分つ事が出來ると思ひます、第一期は卽コロンバスの亞米利加發見、バスコダガマの印度航路發見に直に續く時期でありまして之を名けて拓殖交通の時代と言ひます、此時代に於きまして歐羅巴の國々は御案內の如く初て文藝復興といふ精神上の革命と敎法改革といふ社會上の大革命とを經たばかりでありまして之は所謂モダーングレートナショナリチースの發達すべき時機であります、多くの國民は未だ多くの能力を域外に伸すことは出來なかつた、その當時極めて有利な境遇に居つた者はバスコダガマを出せる、葡萄牙及コロンバスを出だせる西班牙、是等の國には當時の政治上の問題を解決するに向つて明かに一日の長といふ位地に在つたのであります、況や其當時既にフェルジナンド及イサベラの聯合になりました西班牙は既に統一されて居つた而して新航路の發見に成功したものでありましたから先づ此點に於て第一の先鞭を着けたのが西班牙及葡萄牙であつたのであります、續いて又和蘭が之に對して甚だ僥倖な地位に居りまして、拓殖交通といふことに先驅をなした、和蘭の次には英吉利が和蘭に打勝ちまして而して是まで戰さの爲に費した勢力を次第に拓殖交通の方に向けるに至りました、而して西班牙葡萄牙といふものは段段萎微して參りました、殊に西班牙が勝誇つた海上の威勢に乘じて有名なるインビンシブル アルマダといふ二百五十艘の戰艦を以て近く言へばロゼストエンスキーがバルチック艦隊を率ゐて日本へ來襲したと殆ど匹敵すべき勢を以て英吉利の近海に現はれた、之に對して我が東鄕提督の地位に立つて立派に戰捷を收めたのは卽ち

英吉利の海軍大將ドレーキでありました、是に於て英國は海上に於て大に振ひ其餘波として英吉利は隆々として旭日の昇る如き勢でありました、遂に第十七世紀以後は和蘭はさう甚だしく衰へは致しませぬが西班牙葡萄牙は海上の覇權を握つて居つたのに代つて英吉利が海上の覇王となつたのであります、而して後馳に之に次いだのが佛蘭西であります、是等の國は主として新大陸に於て和蘭は東洋の東印度群島に於て大に拓殖事業を進めた、卽ち本國から直に交通を開くといふので無く其人間を植ゑてその出來た人間と本國との交通を開くといふ樣に變つて、之が近世紀の初以來行はれたことで第一期は卽ち拓殖交通の時代であります、遂に是が殖民地といふものになつたのである殊に或點に於きまして舊慣舊格といふものに支配せられ其舊慣舊格と云ふものは社會進歩の一つの大なる要項であります、秩序も極めて大切なものでありますけれども、若夫れ、舊慣舊格ばかり用ゐますと秩序が勝つて進歩せぬといふ社會になるのでありますから斯かる社會は餘り多く發達するもので無いのであります、然るに殖民地社會は殆ど何等の舊慣なく舊格なく卽ち全力を以て前方に突進すべき性質の社會でありますから或點に於ては殖民地社會の進歩は確かに本國を駕するものがあります、此の如くにして殖民地が次第に發達しますると往々本國と殖民地とでは之を連鎖する機關が無く隨つて社會的運動を生ずる、卽ち殖民地の獨立であります、故に第一期拓殖交通の時代に連れて出て參りましたのはどうしても此の殖民地の獨立時代といふ事にならねばならぬ、此時期に於ける先鞭を着けたのは誰であるかといふと卽ち千七百七十六年よりして千七百八十三年迄英吉利のコルンウオルスが大軍を率ゐて攻めたのを獨立軍が擊退した壯烈な亞米利加の獨立戰爭であります、續いて南亞米利加の西班牙領殖民地の獨立、續いて墨西哥の獨立といふ樣な殖民地大亂、又獨立の時代となつた、之から進んで第三期に至つては玆に初て歐力東漸の時期となつた、其歐力東漸

の先驅と見るべき大事件が二つあります、一つは千五百十三年九月二十六日に西班牙人バルトロメウ　デアスといふ者がダリエンの地峽を遠く去りまして西の方太平洋を發見した、是が嚆矢だ、既にしてマゼランが船を太平洋の水に浮べた、太平洋といふ名前はマゼランが與へた名だ地圖を繙くと南亞米利加のパタゴニヤの南端ヒラデルヒユーゴは申さば南亞米利加大陸の希望峰たるマゼラン海峽であります、太平洋を歐羅巴人の通つたのは是が嚆矢であります、固より日本人は初より太平洋を知つて居つた、今一つ著大な事件は卽ち西比利亞建設であります、露西亞が西比利亞を建設いたしましたのは實に千五百八十一年であります、初て西比利亞を建設し而してオコツク海に政治上の手を伸べ出したのは千七百六年であります、僅か百二十五年の間に三千里の境域を興した、之を積つて見ると一日に二町何間づゝ進んで居る計算になるのであります、此間の露西亞の政策は必ずしも拓地殖民に在つた譯ではありませぬ、其目的とする處は唯々、コザツク騎兵と犯罪人とを送つて地を略したのであります、その略した處の地を拓殖することは言ふ迄も無い、そこで太平洋の發見と西比利亞建設といふ二大事件は第一期二期といふ間の準備的事項となつて居りまして而して第三期に至りまして歐羅巴の力が東に進んで來ることになつた、

此歐力東漸といふことは我々は四つの道筋から來たものと見ねばならぬ、その一は卽ち印度の方面よりせる英吉利の力であります、第十八世紀の半以後から致しまして英吉利人が印度に向つて勢力を伸ばすことが次第に加はつたのであります、尤も印度に手を伸ばしたものは英吉利のみでは無かつた、殊に英吉利の最大なる競爭者は佛蘭西であります、亞米利加合衆國に於きましても英吉利と佛蘭西とは長い間互角の爭をして居りましたが遂に英吉利の方が勝を占めました、爾數十年にして獨立の國が出來た譯であります今日に於きましては合衆國の北、それからカナダに於きまして現に

佛蘭西語を話すカナディヤン　フランセイといふ者が百五十萬人居ります、亞米利加のクエベックと云ふ名前は明かに佛蘭西南部の言葉を現はして居ります、然るに彼の場所に於きましてドミニオンオフ　カナダと云ふものは總て英吉利の領分になつて居るさうでありますことは小學生徒も亦知る處であります、さう云ふ活劇が矢張り印度に於て行はれました、而して第十九世紀の初に至りまして全く英人が印度を握るといふことが出來て仕舞つたのであります、英人が印度の方へ參りまして茲に根據を定めその勢力をして極めて容易に極東の方面に及ぼす事が出來た、卽ち香港を略し、明治十七年に朝鮮の巨文島に手を附け、(尤も巨文島は其後手を離した) 日清戰役の後は威海衛に據り其間に一つの仕事として日本に向つて條約を迫つたといふこともあります、是が卽ち歐力東漸の四つある道の一つであります

第二は卽ち唯今申しました露西亞が西比利亞の道から這入つて來たのであります、露西亞が支那に這入つて參りましたのは前の西比利亞建設の時代に這入つて參りました、遂に支那の國境まで來まして盛んに支那と角逐を試みた、併ながらその當時支那は所謂康熙帝が盛んな時であつて支那固有の皇室に勝つて支那の實力を有して居つたから露西亞も餘り多く之に向つて鷙梟の慾を逞しうすることは出來なかつた。カザリン二世に付て支那に於て書いた本があります私は人から觀せられました其書物は名を忘れましたが、カザリン二世、露西亞で云ふとイカテリナ女王であります、此時支那の讓歩を得て露西亞は暫く鋭鋒を藏め、千六百八十九年、支那の康熙二十八年有名なネルチンスク條約を以て暫く鋭鋒を藏めた、併ながら露國南下の志は未だ曾て頃刻も休止する處なく再び障碍物の手が弛むと又忽ち發展して來る、是が露國外交の相傳の秘訣であります、此の如くして一時手を弛めた露西亞が更に千八百六十年に海港を得た卽ち浦鹽斯德であるこのウラヂオストックと云ふ事は東方の覇者といふ意味である、決して平和の

意味で無い、此の如く傍如無人の名前をその經營せる浦鹽斯德に冠らして益々、東漸南下の勢ひを貯へつゝありました、是が卽ち歐力東漸の第二の道であります第三の道は歐力東漸と言ひつゝ實は西漸にして亞米利加から來た、是が爲に太平洋は非常に役立つたさうであります、先きに太平洋の發見といふ事を伏線として述べて置きましたが卽ちそれであります、卽ち米國人は嘉永六年六月に日本へやつて來た今日と雖も諸君は浦賀へ遠足をして御覽なさると其年寄の與力をして居つた人に御逢ひになる事が出來る、一日五人扶持を貰ひまして浦賀の固めを仰付けられた幕末の老人諸君に必ず御逢ひになるのであります、六月三日より六月十一日迄黑船が四隻來たといふ騷ぎ、是が卽ち歐力東漸の第三の經路でありまして、此經路と云ふものが內心は兎も角比較的最平和的に最文化的交通を旨として政府も迎へた、

第四の經路は是等に比しては殆ど言ふに足らぬのであります、併ながら隨分長い間經營した佛蘭西であります、後印度から參りました佛蘭西の勢力であります、元、ゼスイットアレキサンドルツーロード是は千六百二十四年から千六百三十年迄及千六百四十年から四十六年まで今の交趾支那、東京に滯在し親しく國情を調べて佛蘭西に報告したその時以來佛蘭西は後印度を覬覦すること一日にあらず十九世紀の半より以後になつて後印度は極めて佛蘭西の確かな足となり交趾支那は佛蘭西の殖民地で東京、安南、柬埔茶を佛蘭西の保護國となし暹羅の東岸も屢々佛蘭西に依つて脅かされる卽ち佛蘭西は確たる足溜りを得て此處を起點として支那を脅かす、是は明治十年に清佛戰爭もありその前に鴉片戰爭で英佛力を戮せて北京を擣きました、又近頃は雲南貴州の方面より着々と名を清國內部の開發に藉つて實は利權の壟斷に努めつつある次第であります、是が卽ち後印度を土臺とせる佛國の歐力東漸の第四經路となすべきものであります

その外、是等よりは稍輕い事でありますが併ながら葡萄牙、西班牙、も亦東洋に發展しましたけれ共其領屬の下に在つて遂にマーシヤル群島を千六百萬マーク(約八百萬圓)で獨逸が買つて獨逸人は得意の絕頂に達した、さう云ふ巧みな政治家が澤山ありますが日本ではさう云ふ風にして日本を大きくする事に得意な政治家と云ふ者は餘り見受けぬのであります、さう云ふ風に分けまして歷史上に眼を着けて行きますとチヨイ〳〵あります、千八百七十年に亞米利加大統領ブカナンの時に露西亞領のアラスカであります、御案內の通り北亞米加から日本の方へ龜が首を出した樣な處を賣つた僅か七百萬弗に過ぎませぬ、斯んな賣買などといふ事は我が政治家に出來るものぢや無い、我が政治家は貝加爾以東を割讓しやうといふのである併ながら平和の手段で買ふといふ事は今の隱居的顏付をして居る政治家には出來ますまい、故に私は日本の政治家に囑望いたします日本の發展の爲には斯う云ふ買物には始終眼を着けて頂きたいのでありまず、

拠て德川三百年の鎖國時代を通じて或は宗教を以て我國を侵したけれ共又貿易を許されるし更に西洋の事情を我邦に取次ぐと云ふ點に於て我邦の爲になつたのは、先なるものは西班牙、葡萄牙後なるものは和蘭であります、是等は今日に於て殆ど言ふに足らざる勢力でありますけれ共是亦歐力東漸の第二位の重要を有する道筋が彼等の內にあります、而して斯かる歷史上に於ける國にあらずして現今第二位ながらも頗る我々が注目すべき者が二つあります、其一つは突然飛火を致しました膠州灣、青島に據る獨逸であります、今一つは千八百九十九年卽ち明治三十二年に列國の擧に倣ひまして今度清國で海軍根據地、日本ならば橫須賀、佛蘭西ならばツーロン、露國ならば、クーロンスタットとも言ふべき三門灣を取つたが、それを持果せなくして直に棄てたといふ大失敗がありまず之は伊太利政治家の仕事であります、此二つは飛火として歐力東漸といふ事が如何ばかり壯烈な勢を以て今日東洋の天地を焦しつゝあるかとい

ふことの一つの證據になるものであります、先づ大體の點は此四つ、英露米佛、四つの道筋で近世の世界交通の第三期たる歐力東漸時代といふ歴史時代が進んで參つたことであります、

而して其事の起る處は如何なる時期かといふと明治維新の影響として東洋覺醒の時代が參つた、東洋覺醒の旗頭、先覺者は申す迄も無く我日本であります、續いて支那も日本と戰爭の後覺醒して來た、朝鮮はどの位まで覺醒したか分らぬが或點までは覺醒して居りませう、其覺醒の一例として私は諸君と明治新社會史を概觀しなければならぬ、明治二十年前後に於ける社會は或批評家が之を名けて保守的反動と言ひますが、是は保守的反動では無く卽ち東洋覺醒の先驅であつたのだ、東洋覺醒の饒鐘であつたのだ、此時に至るまで東洋は世界の一箇重要な粗製品であると云ふ考は無かつた然るに此時に於て東洋と云ふものは此世界の重要な粗製品である、西洋のみを以て世界は組織する事が出來るものでは無い、東洋も亦粗製品であらねばなら云ふ樣な國民的自覺の精神が明治二十年前後に於ける保守的反動の時代と名づけられた時に現はれたであります、之を始として東洋は今や覺醒して仕舞ひ又覺醒しつゝある處もあります、西洋は自分の精力の餘れる處を以て更に東洋をも覺醒せしむる大功を成した、此西洋と東洋と交通が卽ち今日の世界交通といふことを形造るに至つた、此の如く歴史の長い路を見て參りますると云ふと實に我々は愉快を覺る、歴史の始に於きましては世界の各地に於ける少しも相知らず相關せざる小部落、小社會といふものが澤山に散ばつて居つたのである、是等の小部落と云ふ是等の小社會といふものが互に何等の交通をもしなかつた其小社會小部落共が一つ交通し二つ交通して遂に世界到る處に交通圈を拵へ、又第九世紀の初に至りますると迄は東洋と西洋といふ二つの交通圈となりその二つの交通圈が又今日は合して一つの交通圈となりました、是に於て初て世界が事實上に於て全く一つの交通圈を形造る樣に至つたのである、

卽ち昔に於ける世界（ゼウオールド）と云ひ昔に於ける人間（ヒユマニティー）といふものは極めて小さな部落、極めて小なる社會にあらざれば稍々發達せる處でも西洋丈けで社會をなし東洋は東洋丈けの社會であつたのであります、卽ち三國一といふ言葉があつた是は何を意味するか分らぬ、日本、唐土、天竺に於て第一等といふ事で、三國一といふのは世界一を意味したのであります、知る可し東洋人の祖先が如何に世界を狹く解釋して居つたかを、併ながら是は我祖先の恥と申すことを告白するのみならず此恥は又西洋人も共に分たねばならぬ、西洋人が世界を如何に狹く見て居つた と云ふ事は西洋の思想の沿革を見ると分る、羅馬のバチカンに於て東大陸西大陸の繪が描いてあります是は羅馬のラフアエルサンチヨなどの美術家が出た以後の建築であります、けれ共それより古いのを言ひますると獨逸のニユルンベルグと云ふ古い市に博物館があるそこに地球儀が大分有る、是の地球儀の内、私が見た處で一番古かつたのは千五百二十八年の地球儀であつて、此圖はどうかといふと西洋から西へ〳〵と航海してさうして東洋亞細亞へ來る、その間に之は大陸といふ名があるが大陸で無くして中陸であります、中位の大陸があるそれはどう云ふものかといふと長方形な島がある、さうして其處にジパングと書いてある、マルコポロー以來、我日本を西洋人に考へられた名はジパングであります是は濠太利亞の少し小さい位、未だ曾て行かずと其地圖に書いてある、卽ち西洋人はその時は地球の圓といふ事は稍、知つたのでありませうが今日の所謂西大陸といふものの有ることは知らなかつたのであります、否それのみならず、是より少し前に溯つてダンテ時代に於ける歐羅巴の地圖を見るとゞうあるか地中海の沿岸とそれからジブラルタル海峽からビスケー灣英吉利チヤンネルに這入りまして北海邊までは稍々明い、それから外の世界は皆暗黑の幕を以て被はれて居る、卽ち彼等が當時に於て世界と思ふたのはそれ丈けであります、其頃太西洋の方へ航海

するにマデラ群島、カナリー諸島から先きへ行くと大西洋の水が永久の瀧となつて落る處がある其處が世界の盡頭であるといふ迷想が行はれて居つた、此の如く上代に於ける東洋と此の如き迷想を持つて居つた西洋とが今日に於ては事實上充分交通を開くのみならず尙南極北極の探險すら行はれるに至つた、實に目出度い限りと言はねばならぬ、第十九世紀の後半に於て亞弗利加內地を探檢したのはリビングストーンであります、之に續いてセシルローズは肺病の身を以てローデシヤと云ふ新たな國を建てる而して又亞弗利加縱貫鐵道を布くといふ壯大な計畫をなした、又十年の間北極を探險して八十六度四十分なで漕付けたナンセンがあります、又從來北極探檢より更に困難としてあつた南極探檢を企て八十八度三十三分の處、卽ち今一度二十七分にして南極に達する、僅か南極を距る百十一哩しか無いといふ處まで探險してユニオン　ジヤックの旗を樹てたリユーテナントシヤックルトンがあります、此の如き狀態で今日世界で人跡の到らぬ處は無い、人跡の到る處卽ち文明の曙光の潮ず處であります、卽ち人間は啻に人口に於て發展して居るのみならず併せて又交通の上に於て非常な發達をなした、さう云ふ時代に生れ合せた我々は非常に仕合せな者だと言はねばならぬ、

そこで斯く人間が發展して參りました處で歷史と云ふものの意味が非常に變つて居るとは諸君の御注意になるべき點であります、西洋の歷史家、隨つて又東洋の歷史家はその眞似を致しまして能く申します通り歷史を四つの大なる時期に分つ、卽ち上古、中世、近世、最近世であります、上古と中世との間の區別は羅馬帝國が滅びて、而して耶蘇敎より當時の社會が被つた影響といふものであります、成程是も重要な區別に相違ない、中世と近世との區別は所謂ルネーサンスと云ふのでありまして敎會の權威は稍々衰へて信仰は自由となつた、その他特徵すべきことは澤山ありますが成程是も一箇の重要な區別に相違ない、近世と最近世

の區別は所謂佛國革命からナポレオンが出て居る卽ち自由主義といふものが盛んに起つて來た政治上に於ては自由主義が勃興し社會上では社會經濟の大發展となつたといふことも大なる區別に相違ない、併なから私は今日に於て世界の歷史家が眼を覺さぬならば恐らくは彼等は門外者から敎を受くると云ふの危機に瀕しはせぬかと思ひます、是から先き世界歷史上の所謂エポック大なる境とすべきものに付て今日は如何なる境であるか、私の眼を以て見ますると今日と今日以前との間には實に大なる境がある、卽ち今日までは本當の意味に於ける世界といふものは成立つて居らなかつた、所謂東洋人の眼に映ずる世界は實は東洋であつたそれを誤つて世界と稱して居つた、西洋の人の眼に映ずる世界は實は西洋であつてそれを誤つて世界と言つたのである、客觀的事實上に於ける世界は未だ曾て成立しなかつたからである、故に是までの世界の性質といふものは本當の世界の性質ではありませぬ、所で彼李鴻章と伊藤公爵閣下とが馬關、春帆樓上で會見されたのを脇から行司をして見ると李鴻章が六分で伊藤公爵閣下が四分と見えたといふ新聞記者等もありました私の愛する否我々の極めて尊敬する公爵伊藤閣下が六分の負であると云ふ事は是敗にあらずして何でありますか、若し夫が事實であつても李鴻章は世界の人物であるか、否々僅に東洋の人物たるパテントが附いたに過ぎぬ、然らば西洋のナポレオンは何うか、彼ナポレオン三世こそは我が栗本鋤雲を通じて日本を自分の手下にしやうと考へたが鋤雲は白髮遺臣讀楚辭といふ詩を讀んで斷然國體の爲にナポレオン三世の術策を斥けた、一世ナポレオンにしましても彼の眼中未だ嘗て東洋の經略は無かつた、遺憾ながら彼は唯、一個の歐洲の人物たるに過ぎぬ、未だ以て世界の人物と稱すべきもので無い、何となれば世界が無かつたから世界の人物が有らう筈が無い、然るに今日はどうであるかその明治天皇陛下の御代になりまして　明治天皇陛下のイニシヤチーブの下に世界的日露戰爭を決行した此

日露戰役を木の頭に世界の舞臺がグルリ廻轉したといふものは是如何なる光景ぞ、玆に初めてヒユーマニティーの根底が置かれた、是より後初めて人物として世界的人物が現はれなければならぬのであります、卽ち我々の歷史眼から言ふと、ナポレオンも唯、人傑と云ふに過ぎないので迚も世界的人物を以て許すことは出來ない乍然此の如き事は今日例を擧げれば歐羅巴では最近世に於ては彼セシルローズ、リビングストーンの如き人があつた、又本當の最近世の人物としてはリユーテナント、シヤツクルトンとか、空中飛揚器の發明者ツエツペリーンとか云ふ者でありませう、實に今日は歷史上非常な時期であります、今日に於て本當の意味に於ける世界は始まつた、本當の意味に於ける世界歷史は今日より始まると言ふ事が出來る、今日までの歷史は世界歷史といふ名を附けましてその實西洋歷史たり東洋歷史たるに止まるのであります、併ながら今日以後に於て本當の意味に於ける世界歷史が始まる、然るに今日以前の歷史は世界歷史で無い、世界前史と言はなければならぬ、今日に至つて初て世界歷史は玆に其一ページを開いたものと言はなければならぬ、且此世界歷史及世界前史と言ふに付て前の時期と後の時期との間に一つの區別特徵がある、それは何かといふと本當の抽象的意味に於けるヒユマニティーといふものが歷史の神髓となる時代とヒユマニティーが未だ歷史の神髓とならざる時代との大區別が有るのであります、現今の先立つ時代までは實はヒユマニティーが直接に人間の歷史の中樞的原理となつて居らない、人間歷史の緊要な中樞的活動力はヒユマニティーと少し異つて居る、それは何であるか、卽ちデイビニティーであります、然るに今を距る七十年前、社會學史の鼻祖たるオーギユスト　コントは此大勢の趨く所を喝破した、彼は何と言つて居るか、デイビニティーは今や下に沈む、之を漢語に譯すれば神は滅沒し而して人は登臨す、神は今や此世に向つて farewell を唱へつゝ夕陽西山に脊く如きも人は旭日の東天に昇るが如く正さに赫々たる勢を以て次第に輝き次第に昇りつゝあると云ふ言葉であります、卽ちデイビニティーといふものが人間世界を支配して居つたその支配といふものは多少變遷或は盛衰はありますけれ共デイビニティーがヒユマニティーを通じて働いて居つた、或は他の語で言ふならばヒユマニティーがデイビニティーを通じて働いたと言つても宜い、然るに今日以後に於て眞にヒユマニティーが働く世の中になつた、是固より一朝一夕の事で無い、歷史は種々の變遷をなす、その機關としてはレリジオンもありシオロジーもあり、フイロソフイーもあり樣々なものがありまして、而して人口の增殖及交通の發達といふ點から見ても此の如き變遷があるのは皆今日以後に於て其ヒユマニティーを大成してヒユマニティーの歷史、といふものが世界の歷史になると云ふの準備であつたのであります、我々が歷史を學ぶ時に正史以前の歷史を神代史といふ事に敎へられて居るのでありますが、私は世界の前史も此意味に於てデイビニティーの歷史、卽ち一種の神代史と言はうと思ふヒユマニティーとデイビニティー及、舊時代との區別は重要な意味として居る是程大切な意味は無い、若し從來歷史家が申す上古、中古、近世、最近世といふものを假に豫備の區別とするならば、今日日露戰役以前の世界歷史は日露戰役以後の世界歷史の豫備の區別にあらずして直に宇宙の區別とせねばならぬ、此の如くしてこのヒユマニティーは非常な進步變遷を取つた、精しいことは此事實に基づいて諸君が歷史を繙かれるに任せます、唯、私はその手引草として一場の蕪雜な講演をして諸君の淸囑に答へた次第であります（拍手大喝采）